演題番号
SP-41

学生と総合診療医をつなぐ「ドクター体験プロジェクト」
～総合診療への早期暴露を図る～

名前　松山峻大[1]　長哲太郎[2]　島津里彩[3]　上田彩加[3]　中島梨沙[4]　松島和樹[5]

所属　[1]滋賀医科大学医学部医学科４年　[2]コープおおさか病院　[3]神戸大学医学部医学科３年
[4]南奈良総合医療センター　[5]神戸総合診療・家庭医医療専門医プログラム/川崎病院

（筆頭演者、共同演者において、開示すべき利益相反（COI）はありません。）

背景・目的

●医学部の現状

医学部の実習では**プライマリ・ケアを見る機会は稀**である。早期実習では大病院が中心になることに加えて、コロナ禍は早期体験実習や臨床実習が制限されていた。初期臨床研修2年目の地域実習で総合診療に関心をもったとしても、既に進路を決定している者が多い。

●早期暴露の重要性

医学生に総合診療への興味をもってもらい進路の一つとして検討してもらうためには、**Early exposure(早期暴露)**が重要だと考えた。医学生が地域医療実習をすることで、地域医療に理解と親和性を高め、将来的に地域での医療に従事する影響を与えられたという報告もある[1]。

実際に、低学年のうちに医療現場を見たいというニーズが学生側にも一定数存在することもあり、**「ドクター体験プロジェクト」**を始動した。このポスター発表の目的は、本プロジェクトの周知と現状の効果の報告である。

[1]岩崎拓也. “地域医療実習による学生の意識変化と地域指向性との関連 ―和歌山県東牟婁郡串本町における地域医療教育―” . 医学教育. 2011, vol.42, no.2, p. 101-112.

活動報告

『ドクター体験プロジェクト』
●対象：近畿12大学の医学部1-4年生(2022年度は1-3年生)
●実施時期：2022年夏・2023年夏
●企画内容：病院・診療所での総合診療の実習
●協力：日本プライマリ・ケア学会近畿支部

	申込者数	参加者数	受け入れ機関数
2022年度	22名	16名	49機関 (実際の受け入れは8機関)
2023年度	21名	16名	37機関 (実際の受け入れは10機関)

合計
参加学生数：32人
受け入れ機関：18

病院・診療所へ学生受け入れの依頼

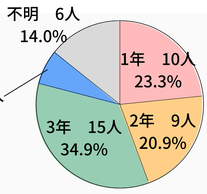
受け入れ医療機関と受け入れ人数
2022年度：病院3機関(7名)・診療所5機関(9名)
2023年度：病院5機関(7名)・診療所5機関(9名)

各大学の学年LINEなどを用いて学生に広報

申込者の大学名と人数
滋賀医科大10名、大阪大7名、神戸大6名、大阪医科薬科大5名、大阪公立大4名、京都府立医科大3名、近畿大3名、兵庫医科大3名、奈良県立医科大1名、名古屋市立大1名

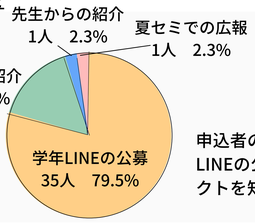
関西2府4県の医学部12大学のうち、9大学の学生からの申し込みがあった。関西以外の大学の申込学生もいた。

学年内訳(過去2年分)



どの学年からも応募があったが、3年生からが最多であった。
※2022年度は4年生が募集対象でなかったため、4年生の申込人数が少なくなっている。

本プロジェクトを知った理由



申込者の約8割が、学年LINEの公募で本プロジェクトを知った。

申込時にアンケートフォームで学生の希望をヒアリング

①都道府県②大都市/中小都市/過疎地域③外来/病棟/訪問診療
それぞれいずれを見学したいか

各学生の希望に合わせた受け入れ施設をマッチング

見学当日
内容は各病院・診療所に一任

見学後アンケートの実施
学生、受け入れ医療機関のそれぞれを対象

アンケート結果　～受け入れ医療機関の声～

受け入れ医療機関に向けた実施後アンケートには、9施設から回答があった。

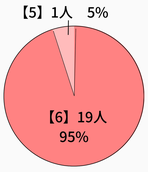
本プロジェクトの満足度についての自由記述では、以下の理由から満足感を得たという声が寄せられた。

・学生の積極性や、実習を楽しんでいたことに**刺激をもらった**。
・**学生教育**に貢献できた。
・自身の**診療を振り返る**機会になった。
・学生との**将来のつながり**を築けた。

アンケート結果　～参加学生の声～

プロジェクトの実施後アンケートを行い、過去2回の参加学生計20名から回答を得た。アンケートの回答方法は、最高評価を6として、6段階評価及び自由記述とした。

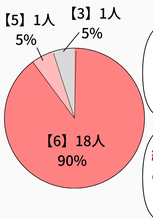
実習の満足度



自由記述(抜粋)
- 先生も**疑問点を分かりやすく説明**してくださった
- 申し込んだ目的でもあった**地域医療の実態に触れる**ということができた
- **卒業してからの生活や目標**について考えることができた
- **はじめてみるものばかりで**とても**勉強になった**

本体験の満足度について、全員6段階評価で5か6をつけた。
自由記述より、高い満足度の理由として、以下の要素が挙げられた。
・低学年の参加者には**初めての体験が多く**、学外での貴重な学びとなった
・訪問診療と外来診療のどちらもを体験し、**現場を広く見学**できた
・**地域と医療機関のつながり**を知り、地域医療の実際を体験できた
・先生方が丁寧に対応してくださり、直接見学や質問をして**将来のビジョン**を考えられた

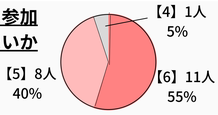
目標の達成度



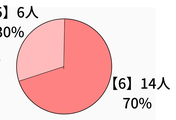
自由記述(抜粋)
- **これまでに見学したクリニックと比較**することで、より深い学びが得られた
- 学校で病院に行くことが**コロナ関係で全くなかった**ので貴重な体験だった
- **総合診療医**の先生や**研修医**の先生からいろいろなお話を聞くことができた
- 今後大学で**学ぶべきこと**や**在学中に磨く必要のある分野**なども認識することができた
- **訪問医療のリアル**を見ることができた

参加者の9割は、目標の達成度に満点の評価をつけた。
自由記述より、高い満足度の理由として、以下の要素が挙げられた。
・希望に沿った体験で、**積極的に**取り組めた
・**大学病院とは異なる**、総合診療の現場に触れられた
・**訪問診療や地域医療**について詳しく知ることができた
・医師と直接話して理想の医師像が明確になり、**勉強や進路選択へのモチベーション**が高められた

また参加したいか



友人に勧めたいか



すべての回答者が「また参加したいか」との問いには4、5、6、「友人に勧めたいか」との問いには5、6の評価をつけた。

考察

●低学年だからこそ学べること

医学部のカリキュラムにある病院実習では、患者さんとのやり取りだけでなく、手技や今までに学んだ知識の確認などを行う場にもなる。それに対して、ドクター体験プロジェクトでは、**専門的な知識が備わっていない低学年だからこそ**、知識がある時とは違った視点で患者さんの立場から医療について考え、感じることを体験する場になりうる。

また、低学年ではどの大学も一般教養から講義が始まり、医学に触れる機会が多くなく、本格的に病院を訪れるのは高学年になってからである。しかしながら、その時には入学当初に思い描いていた医師へのイメージが薄らいでいる可能性が十分に高い。低学年のタイミングで参加することによって、**医学部を志した初心に立ち返る**ことにもつながりうるであろう。

●より主体的に

見学後に、**担当医師やスタッフとの振り返り**を行えることも、このプロジェクトの大きな強みの一つである。大学の病院実習では、担当医師が学生一人一人に時間を設けてのフィードバックを行うことが難しいが、本プロジェクト個人で参加している分、より詳細な振り返りを行いやすい。

●今後の本プロジェクトの継続へ

参加者と受け入れ施設の両方から、本プロジェクトに対する高い評価を得れたことからも、**プロジェクトを継続する意義が非常に大きい。**

展望

●より多くの学生に

本プロジェクトは、臨床現場を見てみたいが自分で病院に申し込んで行くほどの勇気はないという学生が一歩を踏み出す手助けとなったと考える。今後は各大学の医療系サークルへの働きかけを行うなどして**広報を強化**し更に門戸が広がるような取り組みにしていきたい。

●交流会の実施

見学後に**オンラインでの交流会**を設けることで、参加者同士の振り返りや交流を促進したい。参加者には自らの体験を他の学生に話してアウトプットすることで実習の振り返りをしてもらう。本プロジェクトには主体的に学ぶ意欲のある学生が集まるため、他の参加者か刺激を受けることができる。同じ分野に興味がある友達と低学年のうちから繋がりをもつことができれば、今後さらなる積極的な学びやイベント参加が期待できる。

●継続的な調査

見学後も参加者との繋がりを保ち、将来的に**実習場所の選択や進路決定に寄与するのか**調査を続けたい。